

大杉和馬
表紙イラスト ごくげつ桃

ルビーアイズ・サクリファイス
紅き魔王の生贄

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『紅き魔王の生贄 ルビーアイズ・サクリファイス 前編』
『紅き魔王の生贄 ルビーアイズ・サクリファイス 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ルビーアイズ・サクリファイス

紅き魔王の生贄

大杉和馬

表紙イラスト／ごくげつ桃

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

魔王セラス＝ルビーアイ

人間に換算して20台半ばの妖艶な美貌と完成されたプロポーションをもった絶世の美女。真紅の瞳と腰まで伸びた真っ赤な長髪から、紅き魔王と呼ばれている。

勇者

魔王討伐に立ちあがった見目麗しい人間の美青年。剣の腕は非常に高いが、自分の実力にうぬぼれている面も持つ。

カッ!!

漆黒の闇を、真つ白な閃光が照らし出し、数瞬遅れて耳をつんざく様な轟音が周囲を揺るがす。

暗雲に覆われた天空を貫く白光の矢は、幾度も闇を引き裂き、時折その牙を地上へと打ち立てる。

ガガガガッ!!

再び闇の空を一筋の閃光が貫いた。

闇が稲妻によって一瞬切り裂かれ、一つの古城の姿がそそり建つ姿を浮かび上がらせる。だが城とは言っても、華美に飾り立てられた王城と言った雰囲気、その古城から感じることとはできない。

まるで闇に溶け込むような黒と灰色に覆われ、その暗い姿からは周囲を圧するような威圧感と禍々しさを感じることができると。

ゴロゴロゴロゴロ……ッ!!

雷鳴が轟き、湿気を含んだ生ぬるい不気味な風が吹き抜けていく。

暗闇さえも塗りつぶしかねない禍々しい気が立ち込め、周囲に生える木々の姿を不気味に歪め、動物や鳥たちの気配さえ感じられない。

そう、ここは人の世に非ず。そして、この城は人ならざる者が築き、人ならざる者を束

ねる暗主が住まう場所。

魔界——。

ここは、古来より、人に仇なす闇の者の領域だった。

キィ————ンッ!!

だが、城が建てられてより悠久の歲月守られてきた禁忌と静寂は、その日破られることになった。

闇の城の回廊。王座の間へと続く通路で甲高い剣戟の音と、裂帛の気合の声、そして時折爆音が響き渡る。

王城に相応しい広くそして長大な回廊で行われる激しい戦いが、長き沈黙を打ち破った正体だった。

「ハァ————ッ!!」

ザシユウウウウッ!!

気合とともに放たれた闇を切り裂く閃光に続いて、夥しい血飛沫が舞う。

「ギィィィィアアアアアア————ッ!!」

数拍も遅れて、狼とも熊ともつかない漆黒の巨獣が、耳障りな悲鳴とともに、回廊の床へと倒れ伏し、漆黒の液体をぶちまけた。

いや、床に転がる死体はその獣だけではない。

広い回廊の床を埋め尽くすように、幾体もの異形の生物の軀むくろがあちこちに横たわっていた。

「オグアアアアアアアア——ッ!!」

「ヒイヒイヒイヒイッ!!」

響く剣戟と爆音に、またも複数の魔物の断末魔の悲鳴が響き、回廊に横たわる軀の山が高さを増す。

見れば数人の武装した人間たちが中心となって、魔物の軀は生み出されていく。

「ギヒイヒイヒイヒイッ!!」

また一匹の魔物が軀となって石造りの床に倒れ込む。

だが、なぜだろう？

勇壮な戦士たちが、醜く恐ろしい魔物を倒しているはずの光景が、ただの虐殺の現場に見えてしまうのは……？

「どうした!? 魔物ども!! 魔王の本拠を守る貴様らの力はこんなものか!!」

その軀の山を築く集団の先頭に立つ男の存在が一際目を引いた。

闇に沈む魔城の回廊にあって、一際煌やかに輝く白の甲冑に、長く翻る金を梳いた様なプラチナの髪が目にも鮮やかだ。

手にした剣は何か特別な力でも宿っているのか？

淡い光で周囲の闇を照らし、その剣によって切り裂かれた魔物たちはまるで闇へ溶けるようにその肉体を崩壊させていく。

「がははは!! なあ、勇者よ。魔軍の本拠と言う割にはえらく手応えがないなあ!!」

集団の一人、巨漢の戦士が先頭の若者に対して豪快に笑いながら声をかけ、その手にした大斧で巨大な魔物を頭から真つ二つに引き裂いた。

傷だらけの日焼けした貌には野獣を思わせる獰猛な笑みを浮かべ、優に二メートルを越すその身長と筋肉の塊のような体軀からも、彼が相当な腕の戦士だと見て取れる。

鎧や貌に刻まれた無数の傷跡は彼が戦士として歩んできた戦いの歴史、その身に刻んだ武勲の証とも呼ぶべきモノだろう。

「ふっ、当然だ。魔王を倒すために我らは選ばれし戦士だ。こんな魔王の使い魔程度に負ける道理はない……」

勇者と呼ばれた青年は、戦士に応じながらまるでゴミか何かを見る様な眼差しで魔物の軀を見下ろす。

「へっ、ちげえねえや!! これで魔王を倒せばお前さんは英雄だ。たっぷり約束の報酬はいただくぜ?」

応える巨漢の顔には、粗暴な笑みが浮かんでおり、暴力と血に酔ったその瞳は、山賊か殺人鬼のような下卑た印象を醸し出している。

「ああ、もうすぐ僕たちは英雄になる……金も名誉も、地位だって思うがままさ……」
強すぎる野望の光をその瞳にぎらつかせた青年は美男子と言ってよい整った顔立ちをし
ているが、その目つきの悪さは隠せない。

「おゝい、勇者様あ……向こうに扉があつたぜえ〜」

一団の中から一際ガラの悪そうな男が、嬉々とした表情で勇者へと話しかけてくる。
異様に殺気だち、血と死臭を纏った周囲の男たちも同様だが、お世辞にも纏まりがある
とは言えず、勇者と呼ばれた男に対する敬意も薄い。

「へ、いよいよだなあ……」

「ああ……その通りだ」

勇者は緩んだ表情を引き締めると、男の指さした方に見える巨大な扉へと歩を進める。

「さあ、みんな、魔王は、最後の戦いは近いぞ!!」

「おおおおおつ!!」

勇者のかけ声に、周囲で殺戮に酔っていた男たちもにわかに沸き立ち、血と臓物で濡れ
た武器を高々と掲げながら、巨大な扉へと向かった勇者のあとへ続いた。

ギイイイイイイイイイイ——ッ!!

重厚な音を立て、広間の内側へと押し開かれていく巨大な両開きの鉄扉。

その先に、先ほどの広かった回廊よりもさらに広大な空間が、勇者たちを待ち受けていた。

掲げた灯が霞むほどに天井は高く、向こう側が見通せないほどに奥行きが深い……。そこは広間と呼ぶにはあまりに広大な空間だった。

「ようこそ……我が城へ……」

決して大きな声量ではない。むしろ囁くように告げられた言葉が、その広大な空間を奇妙に強く震わせた。

侵入者である全員が、まるで弾かれたように声のした方向、ちょうど空間の中心にあたる部分へと向き直る。

「久しぶりの客人だな……実に数百年ぶりか……」

まるで地鳴りの様に聴く者の心身を震わせる威厳に満ちた声は、まさに闇の城の主に相応しい。

だが、その声の発するあまりの力と圧迫感、見えない何かが押し寄せてくるような重圧プレッシャーを広間への侵入者たちへと送る。

「貴様が魔王か!？」

それでも勇者と呼ばれた先頭の剣士は声を張り上げ、広間の最奥に置かれる玉座の方向へと足を踏み出した。

「如何にも、我こそは魔王……其方が勇者か？」

名乗りを上げただけでまるで広間に雷鳴が轟いたかのような衝撃が走る。

その人物は奥の玉座に座したまま、身じろぎさえしていないにも拘らず、そこから迸る重圧に、勇者たちは気圧され、我知らず後ずさった。

「そ、そうだ。我こそは貴様を倒すために選ばれし勇者だ!! いざ尋常に勝負だつ!! 魔王っ!!」

何とか気圧されまいと、勇者が意気を振り絞って腰の剣を抜き放つ。

だがその魔王の放つあまりに強い威圧感と覇気、そして魔力故に、勇者たちは気づいていない。

その魔王の声が奇妙に甲高く、玉座に座するその姿も、あまりに小柄で細身なものであるという事実には……。

「そうか……」

初めて魔王が動いた。

玉座の上で僅かに身を起こしただけで、まるで山がのし掛かってくるかの様な重圧が、再び勇者の一団を押し包む。

——これが魔王。

ゴクリと誰かの生唾を飲み込む音が周囲に響く。

勇者を含むその場の全員が、今まで自分たちが相手にしてきた魔物とは次元が違う相手だと、心の底から理解させられていた。

その身には闇色のマントを纏い、武骨な肩当てや飾り気のない長衣。

禍々しいほどの瘴気と天を覆い尽くすほどの魔力、地を震わすほどの覇気をその全身から放ち、その僅かな拳動だけで周囲の闇が渦を巻き、自らの主を守らんと密度を増していく。恐ろしいほどの存在感、まさに魔王と呼ぶに相応しい圧倒的な存在だ。

ただ一点を除いては……。

「お、女……？」

そう、自分が倒すべき存在。闇の城の玉座に艶然とした笑みを浮かべたまま座っているのは、見目麗しい一人の女性だった。

「如何にも……我は魔王……魔王セラスルビーアイなり……」

闇に白く浮かぶ相貌を笑みの形に歪めると、彼女は勇者の問いを事もなげに肯定する。そんな静かな名乗りにさえ雷鳴が呼応し、闇を引き裂く閃光が魔王の相貌を今度こそ完全に露わにした。

「ば、馬鹿な……」

あまりに信じ難い、いつそ馬鹿馬鹿しいとさえ言える事実を前に、勇者の口から否定の言葉が漏れる。

だが薄暗がりの中、よく目を凝らせば、ゆったりとした漆黒の長衣でも隠しきれずに浮かぶ見事なボディラインは明らかに女性のモノだ。そこから匂い立つ完成された大人の色

香を強烈な覇気とともに周囲にふりまいている。

何よりも闇の中でさえ輝く相貌は驚くほどに小さく、細く彫りの深い線で描かれたその造形の見事さは、絶世と褒めたたえても過言ではないほどの美女のモノだ。

「あ、あれが……魔王……」

背後で巨漢の戦士が、その美貌に見惚れながらも生唾を飲み込んだ。

完璧に過ぎるほどに整った容貌はまるで神の手による至高の彫刻を思わせ、煌めく真紅ルビーアイの瞳は世の全ての宝石の美を霞ませる。

現実離れた美しさと目に見えるほどに沸き立つ濃密な色香に、視線が吸い寄せられて離れようとしない。

もしも、もしもだがこの魔王が、人の身で生を受けていたならば、王族や貴族を虜にし、大富豪に全財産を貢がせるほどの傾国の美女と称え、恐れられたことだろう。

「どうした？ この魔王が女だとして……何か不都合でもあるのか……？」

女だと侮辱されたと怒ることもなく、燃える炎を思わせる真紅の瞳を猫のように細めると、血を塗った様に紅い唇を三日月の形に緩ませ、魔王は問う。

その背に翻る長い髪も、闇の中で炎の様に浮かび上がる紅蓮の色で、そのあまりにも鮮やかな紅色は、闇の中で魔王をさらに美しく輝かせる。

紅き魔王……ルビーアイ……、その二つ名に偽りはなかった。

ゴクリ……。

その場の誰もが呑まれたように沈黙し、誰かが生唾を飲み込む音が嫌に大きく響いた。

「フっ……」

そんな勇者たちの様子をしばし眺めていた魔王は、やがて嘲笑うかの様に小さく鼻を鳴らす。

そんな魔王の余裕の態度に、金縛りにあつていた勇者の表情が怒りに大きく歪んだ。

「くっ、まさか貴様のその姿は我らを謀る幻か何かか!？」

油断なく剣を構えながら吠えるように叫ぶ勇者の前に、セラスと名乗った魔王は榮しげに喉を鳴らした。

「この姿で、この我が^{わたし}が其方たちの油断を誘つていと……?」

玉座に肘を突き、いささかも余裕を崩すことなく侵入者たちを睥睨する姿は、美女の外見であっても凄まじいまでの威厳に満ちている。

「そう思うならば試してみるがいい。その程度の器しか持たぬ魔王かどうか……その聖剣で問うてみるがいい……」

勇者の構える聖剣の前に、微塵も臆した様子もない。

「へっ、へへ……へへへ……お、おいおい勇者よお。もういいじゃねえか……そんなことはどっちだってよお」

勇者の後方に控えていた先ほどの戦士が肩に巨大な戦斧を担いだまま進み出る。

「俺たちの仕事は魔王をぶっ倒すことだ。相手が女だからって関係ねえぜ……むしろあとのお楽しみが増えていいじゃねえか……」

その視線は下卑た言葉同様に明らかに女である魔王を見下し、嘲笑い、すでに勝利した後の悪辣な行為にまで思いを馳せているのが見て取れる。

「ええ、彼の言う通りですよ……勇者殿」

戦士に同意するように、彼とは対照的なまでに細見の男も前に出た。

枯れ木のように細い手足、神経質そうな顔立ちと、深い知性を感じさせる灰色の瞳が冷たく魔王を見つめている。

手にした不思議な杖と瘦身に纏う強い魔力が、彼は優秀な術師であることを物語っていた。

「我らの任務は魔王の討伐。相手が女性だというならむしろ好都合ではないですか……」
言葉は丁寧だが、言っていることは戦士と同じだ。

女性である魔王を侮り、それにより相手を組みしやすくと喜んでるのが容易に見て取れる。

「おおい、魔王さんよお……俺たちはお前さんが女だろうと手加減するつもりはねえ。まさか酷いとは言わねえよな？」

戦士が、その武骨な顔に嗜虐的な笑みを浮かべ、お世辞にも勇者の仲間とは言い難い野卑な言葉をさえ投げかける。

他の数人の男たちも巨漢の男と同様の表情を浮かべており、美しい女性の姿をしている魔王に対して侮り、そして一様に下卑た視線を向けていた。

だが魔王は戦士たちの問いかけや男たちの下種な視線に対し何も感じないのか、その整った眉一つ動かすことなく、あっさりと首肯した。

「面白いことを聴く男だ……ああ、無論、遠慮などいらぬ……」

侮蔑の言葉や視線に、その真紅の瞳は怒りに燃えることさえなく、涼しげな光で自分の敵対者たちを睥睨する。

「さあ、かかって来るがいい……其方たちはこの我を討ちに来たのだろう？」

玉座から立ちもせず、気だるげな表情で勇者たちを手招きする魔王の姿にやる気と言うモノが微塵も感じられない。

まるで蠅で相手にするかの様な態度は、魔王を女性と侮った勇者たちの怒りを煽る。

「後悔するなよっ!？」

そんな態度に勇者たちは苛立ち、怒りを露わに次々と武器を構える。

彼らは魔の王を討伐するために世界中から選りすぐられた精鋭たちであり、自分たちの力量に対する自負も自信も人並み外れている。

だがそれこそが、今は仇となってセラスの肉体を責めたてていた。

「はははは……無駄ですよ。魔王殿……貴方ほどの力、そう簡単にゼロにすることなどはしない」

「くっ、なんてこと……」

激しい怒りと同時に、自分の知識にさえない媚薬を作り出した男の正体を、セラスは測りかねていた。

「あはは……その男の言う通りだ。抵抗したって構わないんだよ？ ええ？ 魔王……？」
魔王の興味対象から著しく外れているとも知らず、勇者は圧倒的優位に立った余裕からセラスを嘲笑する。

あれほど自分を追い詰め、馬鹿にした女が今、無力な姿を曝していることに嗜虐的な快感さえ得ている有り様だ。

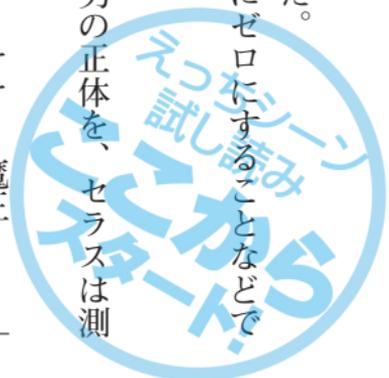
（哀れな男……この男に利用されていることさえ気づいていない……）

これほどの力を持ち、魔王を欺いてのけた男が、こんな小物の勇者にただ力を貸しているなどとは思えなかった。

「さあ、魔王殿……そろそろお楽しみ時間ですよ？」

グイッ!!

そんな魔王の疑問に答えを与える様子も見せず、ローブの男が魔獣に指示を送ると、触



手に絡みつかれたセラスの両脚が無理矢理に開かれていく。

「こ、このっ!! やめっ……くう……やめなさいっ!! 放せっ!! くうううっ!!」

思わず素の言葉が漏れたことさえ気づかずに、セラスは両足に力を込めて阻止しようとするが触手の力は強く、魔力を発揮出来ない彼女の力は、その外見を大きく外れない。

何よりも、身体を覆う熱感と疼き、光の結界による脱力感に、触手の拘束に抗いきることができない。

ブルブルと太ももが痙攣し、幾度も開閉を繰り返しながら、ゆっくりと魔王の形の良い双脚は開かれていった。

「おお……」

抵抗も虚しく左右へと広く開脚された足の間に、男たちの視線が集中する。丈長い魔王の装束に隠された女性の秘境が、衣装の乱れとともに露わになる。

最後の花園を隠す上質な絹で編まれた下着は、大人びた黒色が妖艶なセラスの魅力と絶妙にマッチし、すらりと形良い両脚の間を美しく飾っている。

媚薬によって強制的に分泌された蜜で僅かに濡れた黒の布地は、絶世の美女の色香をさらに艶やかに際立たせていた。

「ふふふ……さすが魔王殿……そこらの小娘の色香など比べものにもなりませんなあ」

「はっ、ははは……魔族の淫婦が……本当に……嫌らしい股だよな……っ」

馬鹿にする勇者の言葉にも品や余裕はなく、その場の全ての欲望の視線は彼女に釘付けだった。

あまりに露骨な視線が自分の足の間に集中するのを感じても、魔王は無様な悲鳴などは漏らさない。

女性としての羞恥などよりも、侮蔑と軽視の視線に激しい怒りに震える魔王だったが、それでも頬が赤らむのを完全に止めることはできなかつた。

(くっ……こんな屈辱をこの魔王である我が受けるなんて……っ!!)

血の様なルビー色の瞳が烈火の怒りに煌めき、白磁の美貌が怒りの朱に染まる様は見惚れるほどに美しいが、逆に陵辱者たちを喜ばせる結果になってしまう。

「どうだ魔王？ この僕が味わった屈辱を少しは理解したか？ ええ？ 魔族風情が勇者の僕に恥をかかせやがってっ!!」

勇者は、触手によって自分の頭よりも高い位置に吊るされているセラスの細い顎を乱暴に掴むと、無理矢理に自分の方を向け、優越感に満ちた視線で囚われの魔王を見下ろす。これまで自分を真に優れ、選ばれた人種だと疑わなかつた自分が、軽くあしらわれた相手に対する憎悪と屈辱感はその整っていた人相を悪鬼のように変貌させていた。

「ふん……うっ、この程度のこと……この我を……うっ、どうにかできるとでも……ううっ!! 思っているのか？」

身動きできない状態に拘束されているとは言え、セラスは魔王だ。

その身に宿る魔力及び生命力は凄まじく、生半可なことではその身に傷さえつけることはできないだろう。

また、この命が危険に曝されようと、誇り高い彼女は無様な命乞いなどするつもりはなかった。

「確かに……魔王殿のお命を頂戴することはこのままでは私たちには難しいでしょうね……ですが……」

ズクン……っ!!

「うぐっ!!」

「先ほどのお薬も十分に効いてきた様です……くく、どうです? なかなか効くでしょう?」

男の言葉を合図としたかのように、先ほど飲まされた淫薬がセラスの体内で活性化する。「くうっ、あっ、はあっ!! こ、このっ……ううっ……こんな薬……っ」

もしも並の人間や魔族であったならば、それほど危険な薬ではない。

だが魔力をそれこそ息でもするよう使うことに慣れたセラスにとって、自身の魔力に呼応して肉体を蝕むこの魔薬は非常に危険な劇薬だった。

その気になれば大陸の一つや二つを消し飛ばせるほどの魔力を持つ彼女の力が、淫らの

力となって自分の身体に跳ね返ってくる。

人の心など打ち砕く破壊力を持つ快楽量だと言うことは簡単に想像できた。

「かつ、はあ……はあ……ううっ……こ、この程度のこと……あううっ!! この程度お……っ」

堪えようと力めば力むほどに無意識に魔力が溢れ、それが快楽の針となって肉体を責め苛む。

歯を食いしばり、男たちを睨みながら、肉の奥から炙られるような熱と疼きに抗するセラスだったが股間に走った電流に、大きく背筋をのけ反らせた。

「くっ、あああっ!! こ、このっ!! な、何をっ!? あうっ、くうっ!!」

両足を開かせたままの姿勢で魔王を拘束していた触手の一本が、外気に曝された下着の上からセラスの花園を撫で上げたのだ。

ゾクゾクと危険な悪寒が下半身を駆け抜け、飛び跳ねるように背筋がのけ反り、首を大きく後方へと逸らす。

「ふふふ、とても敏感なことですねえ。魔王殿……」

「くうっ!! こ、こんな下衆な真似で……うっ、ふうっ……ああっ!!」

シユリ……シユリ……シユリ……

大人びた黒のシヨーツの上から、セラスの割れ目をなぞる様に触手の先端が上下する。

ただでさえ敏感な女の秘部への刺激に加え、得体の知れない魔薬の効果で、魔王のうら若き肉体は否応なく高まってしまふ。

「あつ、はあつ、そ、そこは……ううつ!! はあ……だめ……こんな奴らの思惑にのつては……うう……」

ギリりと奥歯が軋みを上げ、きつく結んだ唇の端を血が滲むほどに噛みしめられた。

だが股間から迸る甘い電流が断続的に神経を刺激し、聡明なセラスの頭脳を霞ませ、強韌な意志を綻ばせていく。

抵抗しようとするれば魔力が高まり、それがさらなる快感の呼び水となる。

「ううつ、くうんつ、はあつ、だめつ、そこ……そこはあつ……痺れる……あはあつ!!」

堪えようとしても漏れる甘い鳴き声は、普段の魔王を知る者からすれば信じられないほどに、切なく艶やかな色香を放ち、周囲を妖しい雰囲気染め上げていく。

「あははは……なんだ。可愛い声でなくじゃないか魔王。どうだ？ 僕に許しを請うなら助けてやるよ？」

ローブの男の命令に、触手は拘束したセラスを勇者の目の前まで運ぶと、魔王はM字に開脚を強いられた屈辱の姿勢のまま、卑劣な男を見上げる形で地面へと降ろされる。

「くつ、誰が……其方の様なクズに……はあ……許しなど……請うものですか……つ」

小物の嘲笑う声に屈辱の怒りが湧き上がり、鮮やかなルビー色の瞳が下衆な男を睨み据

える。

未だ自分の状況を理解していないようだが、この元勇者などに、そんな権限があるとは思えない。

もし仮に自分を助ける権限がこの男にあったとしても、この様な輩に命乞いをするくらいなら、セラスは喜んで死を選ぶだろう。

「コイツっ!!」

こんな状況においても自分を馬鹿にするセラスの態度に、自分を抑えることを知らない男はすぐさま激昂した。

グイッ!!

「あぐらっ!!」

怒りに任せ、目の前で開脚されたままのセラスの股の間を乱暴に靴を履いたままの足で踏みつける。

しかも、下劣な男の暴力行為にさえ、股間に走った甘い愉悦を感じ、セラスは自分の肉の陥落ぶりに戦慄をさえ覚えていた。

（ま、まさか……ここまで感度が上がって……?　くう、冗談じゃない……こんな男に……）

ゾクゾクと背筋を走るおぞましい感覚に肌が粟立つが、歯を食いしばって堪える。

何よりもこんな相手に女としての弱みを見せてしまうことは。彼女の高すぎるプライドが許さなかった。

「はははは……なんだ感じてやがるのか？ え？ さすが淫乱な魔族だな。オイ？」

だが魔王に対する恨みで、妄執じみた怒りに取り憑かれている男の目から逃れることはできなかつた。

「うくうつ!! や、やめつ!! あううんつ!!」

「良いザマジヤないか!! どうした、ほおら、何とか言ってみろよ!」

「くうあああああつ!!」

仇敵の弱みを見つけた男は、さらに体重を乗せて足先でセラスの秘所を踏みにじる。

グリグリと押し付けられて来る加虐の責めに堪らない愉悦を感じてしまい、何度も身を震わせるセラスの姿はさらに男の嗜虐心を煽った。

「おやおや、魔王などと呼ばれて勘違いしておりましたが、どうやら彼女はマゾの気があるようですねぇ」

「そりゃいいや。この僕に、勇者の僕に踏まれて感じているのかい？ どうしようもない変態だね!!」

「くつ、だ、誰がその様な……こ、この魔王を侮辱するなんて……んぐううつ!!」

屈辱のあまり男たちを罵倒しようとするが、さらに力任せに秘唇が勇者の爪先で踏みつ

けられる。

女性の肉体の中で最も敏感な箇所に加えられる虐待が、魔薬の力によって快楽となって股間を駆け抜ける。

「ほらほらどうした？ 随分いやらしい音がするぞ？」

グチュグチュグチュ……ッ!!

男が足を動かすたびに、意図せず分泌された愛液が卑猥な音を立て、同時に強すぎる刺激がセラスの快楽中枢を直撃する。

本来なら激痛を発してもおかしくない刺激が、強烈な快感へと変換されて、セラスの脳を殴りつける様な激感が襲った。

「あぐううっ!! ぐっ、ふ、ふんっ!! 大きなお世話よ……この……下手くそ……」

だがそんな目にあって紅き魔王の瞳から反抗と誇りの輝きは消えることはない。

強烈な意志の力で肉体の反応をねじ伏せ、卑劣な男たちを睨み付ける目から怒りと覇気が僅かでも薄れはしなかった。

「こ、こいつまだ……っ!!」

「まあまあ……よいではないですか……」

そんなセラスの態度に鼻白む勇者に対し、男はむしろ楽しそうに声をかける。

「魔王殿ほどのお方……そうそう簡単に屈しはしないでしよう。その方がむしろ楽しみが

増える……ですが……」

ジュルジュル……。

四肢を拘束するモノとは別の触手の群れが不定形な魔獣の身体から沸き立つ。

「その強気もいつまで持ちますかな？」

「ぐっ!!」

増えた触手がセラスの首に、手首に、足首に、一気に群がりセラスの身体で空いている箇所を埋め尽くそうと這い回る。

マントが乱暴に引き千切られ、ふくよかな胸は衣服の上から絞るよう乱暴に締め上げられる。皮のロングブーツが乱暴に脱がされ、その素足にさえ触手は群がった。

まるでミミズの群れが素肌の上を這い回っているようなおぞましきで背筋に悪寒が走ると同時に、お押えきれない愉悦が身体を震わせた。

「どうやら魔力を抑えようとしているようですが、無駄なことを……貴方ほどの強大な魔力をそうそう簡単に抑え込めはしない……貴方自身でさえ……ね……」

「くうっ……だ、黙りなさい……いったい其方は何が目的なの……?」

男の言葉が事実であることを誰よりも知りながら、それでも屈服を選ぶつもりはなかった。

それよりも目の前の男の正体と目的が知れない。

肉体の奥から湧き上がるうとする快感と魔力を必死に抑えながら、その真意を探る様に相手のフードの奥で光る眼を見据える。

「ふ、ふふふ……やはり貴方は油断がならないようだ……これは早々に墮ちていただかないと危険なようですね……」

パチリッ!!

そんな魔王の態度にフードの男の声が真剣みを帯びる。

枯れ木のように細い指を鳴らすと、魔王を拘束する獣の身体が不気味に発光し始めた。

「こ、これは……ぐくうっ!!」

ビクンッ!!

不気味な光が触手をゆつくりと伝わって、セラスの四肢にまで到達した瞬間、その全身が大きくしなった。

「あっ!! うっ!! くうううう!!」

それまで辛うじて悲鳴や嬌声を抑えてきたセラスの声帯から苦悶の悲鳴が迸る。まるで海老のように激しく跳ね、反り返り、勢いをつけて暴れ回った。

「これは……」

「ふふふ……魔王殿自身の強大な魔力は、意志の力で抑えようとしても、完全に抑えきれぬものではありません……」

セラスの劇的な変化に驚く勇者に、男は笑いながら答える。

「こうやって外から少し、彼女の魔力を吸い上げてあげるだけでいいのですよ……そうすれば否応なく彼女の魔力は外へ放出され始める……」

グジュルルル……。

「あぐうううっ!! す、吸われる……くうあああつ!!」

何かを引きずる様な音とともに、セラスの全身を真紅の燐光が包み込んだ。

同時に、セラスの背筋は折れんばかりに反り返り、その喉から甲高い絶叫が走る。

ただでさえ必死に抑え込んでいる強大な魔力の圧を、外へ向けて引き出すべく力が加わり、魔力はセラスの意志を無視して外へ向かって放出し始める。

「だ、だめ……くっ、今魔力が外にでたら……くうああつ!! 魔力出たら……ひあつ!!」

淡いホタルの灯の様な赤い燐光がゆっくりとセラスの身体の外へと引き出され、そして触手を通して醜悪な獣の方へと流れていく。

それに呼応して上昇する体温、熱された血流は一気に加速し、ビクビクとセラスの四肢が感覚の暴走に痙攣を繰り返した。

まるで魂がすり抜けて行く様な脱力感に加え、腰がドロドロに溶けてしまうと思うほどの愉悅の嵐が、下半身を中心に荒れ狂う。

「抜ける……魔力が……くうはあつ!! こんな、あつ、痺れ……くうううっ!!」

「お、おとお……これは素晴らしい……なんとという魔力……なんと濃密で……強大な……これが……魔王の力……」

「くう……こ、こんな真似をして……ふうつ、ただで済むと……思わないことね……この借りは必ず……」

自分の魔力に対して、過敏に反応してしまう今のセラスに、この責めはあまりに強烈だった。

身体の奥から無理矢理に引きずり出される魔力。それに呼応して肉体を快楽で侵食する媚薬。

抵抗も虚しく高まっていく肉体は、瑞々しいセラスの肢体を官能の色へと確実に染め上げていった。

「はあ、はあ、こ、このっ!! わ、わたし私の魔力を……こんな下賤な獣なんか……あがあがっ!!」

加えてこんな醜い獣に自分の命の源とも言わべき魔力が啜られていることに屈辱を覚えずにはいられない。

だが、抵抗しようとしても、抑えきれない微かな魔力が無理矢理に引きずり出されていく。身体の内側を無理矢理に引きずり出されるような、おぞましいバキューム感さえ恍惚を呼び、それが何よりも気高く高貴な闇の王に屈辱を与えた。

(く……この様な輩に……良い様に力を奪われるなど……この魔王が……この我が……)
 屈辱に齒ぎしりし、血が滲むほどに握りしめた掌に爪を立てる。

セラス自身の魔力があまりにも強大すぎる事が災いし、その流れを完全に抑えることが出来ない。

おまけにそうしている間にも、全身を這い回る触手の動きは活発化していく。衣服の内側に潜り込んだ不埒な触手のせいで、内側でまるで蛇が這い回っているかの様に衣装が不自然に盛り上がり、不気味に蠢いている。

「ううっ、くうっ、あつ、ふあああつ!! こ、このっ!! 好き勝手して……うくう!!」
 魔力の活性化により感度を増した肌の上を、無数の触手が這い回る感覚が、堪らない愉悅を呼び、漏れる苦悶の声に甘い物が溶け混じる。

無理矢理に引き出される自分の力がこうして恍惚を呼び、それを奪われる屈辱と怒りに、誇り高き魔王は自分の不甲斐なさを呪った。

(許さない……絶対……この我を侮辱し、陥れたことを……万死を以て報いさせる……)
 もしも、正々堂々とした戦いならば魔王はたとえ結果が己の無残な死であっても、肅々と受け入れただろう。

心であれ、力であれ、強き気高きものには敵であろうと敬意を払う。それが魔王の業とも言うべきあり方だ。

だがこの様な卑劣な輩に屈するつもりは、セラスには欠片もなかった。

「ぐっ……あっ……あううっ……熱い……くう……身体の芯が……燃えるように……くうう……」

引き出された魔力は、肉体を内側から愉悅に染め上げていき、燃え盛る炎の熱は魔王の意志を以てしても耐えきることはできない。

皮膚の下から炎で炙られるような未知の感覚と、身体の芯が溶けていく様な脱力感と焦燥感がセラスをどんどん追い詰めていく。

「……こりゃいいや……いいぞ。もつと無様に踊れよ。魔王!!」

セラスの反応に、卑劣な勇者も、ようやく笑い声を上げる余裕を見せ始めると、おもむろにズボンを脱ぎ始める。

そこには懊悩する魔王の姿を見て興奮したのか、醜く反りあがった男の象徴が、血管を浮き上がらせながらピクピク震えている。

「そうら、最後はこの僕がトドメを刺してやる……そんな獣なんか貫かれるより光栄だろぅ?」

「くっ、ふざけ……るな……あはあっ、ううう……こ、この我わたしの身体を勝手に……や、やめっ……」

魔獣は巧みに触手を操り。まるで勇者の前にご馳走を差し出すかの様に、暴れるセラス

を彼の前へと運ぶ。

ビリッリっ!!

無理矢理開かれた足の間に滑り込んだ触手が、乱暴に濡れた下着を掴むと、そのまま一気に引き千切った。

「くっ……く、く……このっ!!」

必死に身を振るが拘束された身体はビクともしない。セラスに今出来るのは、赤らんだ顔を陵辱者から背けることくらいだった。

緋色も鮮やかなクレヴァスは、加えられた快楽に反応し、その入り口をすでに綻ばせ、奥から溢れた蜜できらきらと輝いている。髪と同色の赤い茂みに覆われた美しい花園は、陵辱者の欲望をさらに掻き立てた。

「へ……暴れる暴れる……この僕に抱かれることを光栄に思うんだな淫婦!!」

ギラギラと欲望に血走った目で、身動きの取れない女性の身体に覆いかぶさっていく姿は、獣そのものだ。

己の欲望に暴走する野獣の様なこの姿こそが、気取った言葉遣いや勇者の肩書に隠されていたこの男の本性なのだろう。

グチュリ……ッ!!

「あうっ!! ぐうううっ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>